

ゆる距離ゼロ以)で撃ちまくるなどの乱戦に乱戦を重ねたこともありました。

柄田支隊長は「余は最後尾に在り」と反転したのですが、「歩兵砲は前の敵を制圧せよ、だれか外套を落とし、たものはいないか、日本軍の恥になるから装具はしっかり持って行け」と部隊長はただ一人で、兵隊の外套を頭からかぶって歩いてくるのです。敵弾はチュンチュンと部隊長の方へ飛んでくるが、ゆうゆうと部落の中へ入ってきた。暗くなった兵隊の気持は、この姿を見て明るさを取り戻したのです。

作戦が終わって、柄田支隊が感状を受けた。

『柄田部隊は、長駆徐州から作戦に参加し戦場に到着するや、よく軍の右側背を掩護し、石門及び其の附近の要点確保に際しては、数次出撃せる敵をよく撃退し、佐々木支隊が苦戦におちいるや、よく之を援護し、副官齋藤中尉を始め多くの犠牲を出したにもかかわらず、勇戦よく敵に殲滅的打撃をあたえ、之を潰走せしめ、反転に際しては、陽林子方面に行動し、側面より反攻を企図したる適増援二個師を攻撃し、敵に多大の損害を与え、その

企図を放棄せしめ、軍の反転を容易にする等、軍の作戦行動に大きく貢献した』

これが第十一軍司令官横山勇中将からの感状の要旨ですが、私たちが駐地徐州に帰ったのは、昭和十九年二月十一日でしたから、ちょうど一か年間でした。

大東亜戦従軍回顧談

山形県 赤間 清吉

私は昭和十七年十二月一日近衛第二連隊へ入隊を致しました。

其の当時の私の家族の状態は、農地が五町歩強あり、そのため労働力の必要から早く妻をめとりました。

私が二十歳、妻が十九歳でしたから私が入隊の時は、妻は既に妊娠しておりました。その当時の国内の情勢としてはお国のためにすべてを捧げて国民の義務を果たすこと「男子の本懐」で勇躍入隊をした訳であります。

入隊後一週間経た時に家族との面会が許可されるから

家族を呼べとの事で、父母がきてくれましたが妻は来なかった。後で知りましたが妻は十二月二十五日に出産をしたそうです。最愛の妻の顔が見られなかった事は心残りでありました。入隊の日から約十日程していよいよ近衛連隊を出発して征途につきました。

東京の品川駅から列車に乗り、神戸まで列車輸送で、次に輸送船に乗り朝鮮の釜山へ上陸し又列車に乗って一路北上し朝鮮国境の鴨緑江を通過、更に満州を経てやがて満州と北支の境の山海関を通過、十八日頃北支の霍県へ到着。六十九師団(勝)四二一六部隊独立歩兵八十六大隊第三中隊へ入りました。その配属された第三中隊で三か月間の初年兵教育を受け、間もなく幹部候補生試験に目出度く合格したので、臨汾県にある幹候教育隊へ入隊。一二〇大隊でした。その時非常に力を入れて銃剣術の稽古に打ち込みすぎたのか、胸膜炎を二回患って入院を繰返した事を覚えています。

それから甲と乙に別れて乙となり、乙の教育隊へ入り教育終了後中隊へ復帰しました。時に昭和十八年の夏の事と思います。

中隊帰還後間もなく大隊本部勤務となり、指揮班へ編入された。その後警備地に移り、師団も大隊も場所が変わり、少しづつ南の方へ移って夏県に行った。その後は秋の大行作戦がありました。その時私は初年兵教育に当たっていました。

其の当時夏県は負傷兵や通過部隊の基地の様な状態でした。その後は二十年の春頃、運城より中支の嘉定へ旅団司令部が移りましたが、その途中太行山脈をこえて河南省のタークで貨物列車にのり、徐州、南京を経て嘉定県の揚子江の沿岸にあるセンサ鎮へ移りました。

それから陣地構築物資の輸送隊へ転属し、ジャンク(支那の船の一種)二十隻を指揮して大場鎮駅よりラテン鎮への輸送業務に従事していました。二十年八月十日頃日本軍が負けたという情報を支那人から聞いたが、日本軍は誰一人も信じなかった。その後八月十五日に敗戦が確定した。私は丁度輸送隊長の代行職を命ぜられており、部隊の上級幹部と接触する機会がなくて十分判らなかつた。

中隊へ復帰して嘉定県で武装解除をうけ又日本軍所有

の物資はすべて支那軍に引渡しをした。センサ鎮で捕虜生活をしたが食糧が不足で栄養失調にかかり苦しんだ。その時唯一つ有難かった事は、蔣介石の正規軍、中央軍の命令で元日本軍の兵士に対して暴行や虐待をしてはいけないとの指示が徹底して危険がなくて安全がよく保たれたことである。

センサ鎮より移動して呉淞の紡績廠へ集結させられたが、そこで日本人以外の国籍のある旧日本軍兵士の騒ぎで日本人上官がまきこまれて私も頭に負傷をして包帯を巻いた。

いよいよ帰国船に乗るために、上海市政府の建物に入り数日間乗船待ちをして暮らしたが、日本から来る帰国船がよく機雷にふれて沈没して予定の期日に間に合わぬ状況であり、最終的にアメリカ軍の上陸用舟艇で佐世保（長崎県）へ上陸復員した。やっと祖国日本へ帰りついた喜びに浸る間もなく、上陸したトタンに米軍よりDDTの粉末を頭から散布されて、シラミ退治の消毒を受けたことも一生忘れ得ないことである。二十一年一月二十五日と記憶しています。

佐世保で約二日間飯盒炊さんをして時間待ちの後、退職金として若干の額を支給された。一月末の厳冬の時に窓ガラスのない客車にのり、佐世保より山形県へ復員をした。帰宅に関しては、予め帰宅の連絡を家族へすることは出来なかったが、既に勝部隊の人が先に帰っていた話があって、私の帰宅のこともウスウス知っていた様な感じでした。

山形県の故里はその年は特に雪が深くて厚い雪の上を道のない処をトボトボと毛布を頭から被り歩きました。家へ着いて玄関で戸を開いた時の家族みんなで大よろこびをして喜んでくれた事ははっきりと頭に残って忘れません。帰宅するや着衣一切を脱いで真裸となり襦袢まで熱湯で煮沸消毒をしてシラミ退治をしたが、それでも大分後までシラミが出て来て弱りました。又、一か月位してからマラリヤ熱病が再発して約一か年近く苦しみを味わいました。

又、終戦後の武装解除については、完全な解除ではなくて小銃は各人に与えられていた。それは当時既に問題化していた国共対立戦に備えて蔣介石が旧日本軍を新四

軍という共産軍との戦闘に当てようという理由から小銃を与えられていたものと思います。従って部隊によって、は国府軍の勢力下にあつて共産の新四軍、八路軍と戦い、尊い人命を失つていった戦友も出た様で、本当に気の毒な、いたましいことと同情に堪えないことです。

以上の様に戦後四十数年経つた今、自由で豊かな日本に生活して回顧すれば、

一、激しく厳しい教育訓練による二回に亘る胸膜炎の病氣治療入院のこと。

二、風土病であるマラリヤ熱にかかり苦しんだこと。復員後も再発の後遺症に悩んだこと。

三、終戦後、ウースン紡績廠で三国人兵士の報復的暴力事件による頭部負傷のこと。

四、佐世保へ帰国上陸時のアメリカ軍のDDT消毒のこと。

五、佐世保より山形県までの列車帰国が一月末の厳寒期に拘らず窓ガラスのない車であつたこと。(現在では到底考えられないこと)

六、帰宅直ちに着衣全部を煮沸してシラミ退治をしたが、

後々までシラミ発生の後遺症があつたこと。

等々が苦勞話しとして思い出される。その反面有難いこととして忘れ得ぬことは、蔣介石の高い人格の恩恵を受けて、支那軍と接した日本軍に対し掠奪、暴行、虐殺がなされなかつたことで、正に世界史上に残る蔣介石軍の快挙であつた。

以上、いづれにせよ先の大戦に従軍した軍人がそれぞれの地域、場所、相手軍等の条件においてのおのの大きな苦勞を尽くして戦い、九死に一生を得、死線をこえてどうか帰還したという辛い、悲しい、暗い、現在の日本では、絶対に想像出来ぬ体験を風化させずに、しっかりと後世に伝える為に、政府は基金の事業として取り上げ、推進していることは非常に有意義なことであると見え、この事業の成果があがることを切に祈って止みません。